できることを精いっぱい

元気よ、届け

日赤県支部・被災地便り

日赤県支部総務課長
山本裕行さん

東日本大震災の発生から五カ月余。被災地は復旧から復興へと段階が切り替わり、現地に入って被災者を支援するボランティアなどの派遣も、次々と打ち切られている。発災直後から現地に入り、岩手県や宮城県で医療支援活動を続けてきた日赤県支部医療班も、最後の派遣から帰還し活動に一区切り。しかし被災地の苦しみはまだまだ終わってはいない。医療班の一員として何度も現地に入り、被災地の現状と被災者の思いをつづってくれた日赤県支部山本裕行総務課長に、「元気よ、届け」最終回を届けてもらう。

診療に当たるメンバー＝7月18日、宮城県石巻市の渡波小学校避難所で

被災者と共に励まし合い

区切り

われわれ日赤県支部救護班の東日本大震災被災地に対する医療支援活動は、七月いっぱいをもって、いったん区切りをつけた。現地に入り、現地の皆さんと共に生活し、互いに励まし合った者として、正直、後ろ髪を引かれる思いを残して。

医療活動は今後、地元の医療チームで対応していくという。地元のことは、そこに住む人たち自身の手で。その理念は分かる。でも、地元の開業医が津波にさらわれ、全員が亡くなったり行方不明のままだったりという実情。地元で新たな医師を確保する困難さが見えてしまう。

われわれに言える、たった一つの言葉を繰り返すしかなかった。「何かあったら、われわれに声を掛けてください」と。

われわれの活動としては最後となった「こころのケア班」も、八月八日をもって派遣を終えた。自身にとって最初の派遣で、最後の要員の一人となった県支部の女性職員、荒井左和子経理係長は、帰還後に「もっと早く赴けばよかった」と残念がった。

「私が行って何ができるのかと躊躇していたけど、行ってみて、ただただできることをするだけだと分かった。できることを精いっぱいしているだけで、それでよかった」と。

ジレンマ

五カ月が経過した時点での、救護班の撤退。正直言って、われわれチームは全員、ジレンマを感じている。続く余震、強烈な暑さ、そして豪雨。被災者も支援者も、疲労は深い。本当の復興は、被災地に住む被災者自身が行うべきものとはいえ、今はまだその時ではないのではないか。代わりにわれわれが対応することに、全くやぶさかではないとの思いは、今も一つも変わっていない。

苦労を共にしながら活動した現地スタッフと日赤県支部救護班。絆はこれからも変わらない＝5月28日、宮城県石巻市雄勝町小島の県雄勝総合支所仮庁舎で

検証会

先月、われわれ救護班のメンバーや職員、炊き出しやパン提供の支援者など百名近くが福井市月見の福井赤十字病院に集まって、東日本大震災の検証会を開いた。

発災直後に出動した白塚秀之医師は「未曽有の大災害で、多くの負傷者の受け入れを想定していたが、指揮命令系統の混乱や連絡・調整が機能しておらず、本来の役割を果たせないジレンマに陥った」と指摘。

「初期研修医を活用するなどしての、救護班の医師二人体制確立」「慢性期に必要な薬の処方や整理にあたる薬剤師を救護班の一員として帯同させる」「男女や職種を問わず、人員や物資の連絡調整を行う要員を育成し帯同させる」など、あるべき救護班の体制についての指摘が次々と出された。

被災地での炊き出し活動を行った福井北商工会青年部やパンを提供し続けたパン屋有志らの代表も参加。「このような機会に参加させてもらってありがたい。これからも福井県の赤十字を応援していきたい」との言葉をもらった。最後に救護員指導者の田邉毅麻酔科部長兼救急部長が「日赤と他の医療機関、行政の連携が不可欠で、そのためには日頃から連携することが必要。検証会の意見等を行政にも提言しながら、支援の在り方や防災計画、訓練について考え、生かしていかなければならない」と総括した。

最近になって、若狭湾沿岸が大津波に襲われる危険性についても指摘が出ている。日本最多の原発立地県として、「災害は必ず来る、まもなく来る」という感覚で、津波の避難訓練実施や、避難場所・避難ルートの確認など、早急に行わないといけない。われわれが「できることをできる限り行う」というのは、何もこれからの支援についてだけではない。

礼状

最後に、われわれが最初に活動した、岩手県陸前高田市の第一中学校避難所からいただいた礼状を紹介したい。

「あまりにも突然降り掛かった、すさまじいとしか言いようのない自然の猛威。一瞬にして私たちの眼前から、友を、家族を、多くの人々のさまざまな夢や希望を持ち去ってしまった、あまりにも酷すぎる、手加減なしの折檻さながらの天災」

「どうして、と悲しくて悔しくて、とてもやりきれなく言葉を失ってしまいました。途方に暮れ、明日を、いえ今を、たった今をどう生きていけばいいのか分からない状況の中に、皆さまが差し伸べてくださった温かい心。再起に向け、頑張る勇気を胸いっぱい、いただきました」

「これからどんな困難、どんな生活が待っているか想像もつきませんが、皆さんからいただきましたご支援を心に、前を見て一歩一歩、生かされた仲間たちと共に歩んでいきたいと思います」

頑張ろうみんな。そして、頑張るぞ私たち！

担当デスクから

支え合う「力」に敬服

「元気よ、届け」は発災一カ月後にスタートし、不定期で今回まで十七回の連載となった。筆者の山本さんとともに最も悩んだのが、連載をいつ終えるかということだった。

被災地の苦闘は、まだまったく終わっていない。でも、救護班の派遣を終えるという大きな流れには逆らえない。派遣を終え、この連載を終えることが、被災地支援の終了と受け止められはしないか。

山本さんは、救護班派遣の終了を「区切り」と書いた。今後も「できることを、できる限り行う」と繰り返した。区切りがきても、被災地支援は終わらない。その思いが、被災地にも伝わったと信じたい。

もう一つ、この連載を通じて強く感じたのが「支え合い」。現地へ赴く人たちが被災者を支えるのはもちろんだが、それは支援者を送り出す人々の支えがあってこそだ。

余剰人員はどこにもいない。人を送り出すということは、残った人が残業し、休みを返上してカバーするということだ。短期なら頑張れるが、長期になるほどつらい。スポットライトが当たることは少ないが、このような多くの人たちの「頑張れ」という気持ちが支え合って、支援は成り立つ。特に、日赤県支部と福井赤十字病院の熱意、そして支え合う「体力」に驚かされた。

日赤は組織の性質上、行政などの要請を待たず独自に災害支援活動に動きだすことができる。それでも、各都道府県ごとに支援に対する温度差はある。

発災の三時間後に救護班を送り出した瞬発力、入れ代わり立ち代わり七月末まで派遣し続けた持続力。たいしたものだと思う。

（筒井厚至）